# 仁 科 記 念 財 団 案 内

1986年6月

財団法人 仁科記念財団

# 仁科記念財団 案内 まえがき

仁科記念財団は、記念講演の記録を載せる広報誌 NKZ に、最近の年度の活動報告を附記するようにしてきました。それは、理事会・評議員会に提出する「事業報告および収支計算書」の内容の一部ですが、それをなるべく広い範囲のかたがたにも伝えて、財団について関心を深めていただきたいためにほかなりません。ところが、それだけですと、かつてのような出版活動の沈滞のためでなくても、最近おきている事態のように、英文の出版物が続けざまに和文の NKZ のあいだに入りこみますと、「活動報告」がとどこおって、たまってしまうことになります。また、講演記録を主とする NKZ は、講演に興味をもって、購読なさるかた、講演会を聴きに来られるかた以外に対して、財団に関する広報をおこなう手段としては、十分とは申せません。

戦前の財団法人理化学研究所は、欧文と和文の研究報告の出版のほかに、毎年、各研究室の研究題目と担当研究者の職・氏名を記した質素な小冊子を出していました。それには「寄附行為」という名の、会社などでは「定款」と呼んでいるものに当る文書も掲載されていました。その小冊子につけられていた「理化学研究所案内」という、かざり気のない名称は、当時の「理研」の気風をよく表わしていたように思います。今回つくったこの小冊子にもそれにあやかる名前をつけました。仁科記念財団に対して、すこしでも多くのかたに親しみをもっていただき、支持者になっていただくのに役立てば幸いと存じます。

# 目 次

§ 1.	仁科記念財団はつぎの事業をおこなっています1頁
§ 2.	ニールス・ボーア生誕百年記念講演会開会のあいさつ2 頁
§ 3.	仁科記念賞について
§ 4.	仁科記念研究奨励金について7 頁
§ 5.	仁科記念講演会について7 頁
§ 6.	財団出版物の有料頒布について ・・・・・・・・・10頁
§ 7.	昭和60年度事業報告のまえがきから11頁
§ 8.	仁科記念財団の活動 ―― 昭和 60 年度 ――・・・・・・・・12頁
§ 9.	「財団法人仁科記念財団設立趣意書並びに寄附行為」(抄)17頁
役	員 名 簿

# §1. 仁科記念財団はつぎの事業をおこなっています

# 1. 仁科記念賞贈呈

広義の原子物理学とその応用を中心とする研究分野における卓越した業績に対して銀メダルおよび副賞を贈呈します。

# 2. 仁科記念講演会の開催

ひろく原子物理学とその応用を中心とする学術の進展に関連し、かつ一般の関心 事にもつながる諸問題を内容とした定例の記念講演会および同じ趣旨の地方講演会 を開催します。

# 3. 仁科記念文庫の運営

当初は仁科博士の蔵書および寄贈によって追加された多量の図書を根幹としていましたが、現在は、仁科記念室および朝永記念室にある多数の貴重な資料の整理を主としており、その成果を広く利用しやすくするための作業をおこなっています。

# 4. 仁科記念研究奨励金の贈呈

- a. 小規模国際シンポジウム開催を援助し,
- b. 在外研究をする若い研究者に1年または2年間の滞在費および旅費を支給します。

# 5. 外国のすぐれた学者の招聘

諸外国の指導的な科学者を招いて講演を依頼し、かつ我が国の研究者と交際し、 討論に参加してもらいます。

# 6. 広報および調査

広報誌 NKZ その他講演記録等の出版、および仁科博士をめぐる科学史資料の収

集調査をおこなっています。

# § 2. ニールス・ボーア生誕百年記念講演会開会のあいさつ

昨年10月7日は、ニールス・ボーア生誕百年にあたり、コペンハーゲンで盛大な記念集会がおこなわれましたが、わが国でもコペンハーゲンからモッテルソン教授を招いて記念講演会を11月9日日本学術会議および日本物理学会との共同主催でおこないました。その講演会の開会にあたって、仁科記念財団理事長がおこなったあいさつの英文は、モッテルソン教授の講演記録(財団の出版物No24)の終りに載せましたが、その日本語版を以下に掲げます。

# ニールス・ボーア生誕百年記念講演会挨拶

1985.11. 9

仁科記念財団理事長 久保亮五

NIELS BOHR の名が、今の高校物理の教科書にでているかどうか、よく調べてはいませんが、近代科学に多少とも関心をもつ人なら誰でも20世紀物理学をひらいた巨人として、その名を知っているにちがいありません。NIELS BOHR は、百年前、1885年10月7日デンマーク国 COPENHAGEN に生まれました。これを記念して、今年は、世界各国で様々の催しが行われました。COPENHAGEN のニールス・ボーア研究所では、いくつかのシンポジウムが催され、そのハイライトとして、去る10月4日から7日にわたって、世界中から300人を超える科学者をあつめて、NIELS BOHR CENTENARY SYMPOSIUM が開かれました。私も幸いにしてこれに参加いたしましたが、今世紀、驚嘆すべき発展をとげた物理学と、これを中心とした化学や生物学の現在と将来を見渡す重要な講演と討論があり、その礎をすえた巨人の偉業を偲ぶにまことにふさわしい会合でありました。

今日の記念講演会は、そのように広い分野をカバーするものではありませんが、 NIELS BOHRがその後半生、もっとも力を注いだ原子核物理を中心として、 MOTTELSON 教授に記念講演をお願いいたしました。今更御紹介するまでもないことでありますが、MOTTELSON 教授は、AAGE BOHR、RAINWATER 両教授とともに1975年、原子核理論の研究によって NOBEL 賞をうけられた方であります。教授は1926年シカゴに生まれ、ハーバード大学で学位を受けられた後、1950年以来、ほとんどの時をコペンハーゲンのニールス・ボーア研究所にすごしておられます。ニールス・ボーア教授の御子息であるオーゲ・ボーア教授との協力研究は1951年に始まり、今日に至っていますが、そのテーマは、原子核の中における核子の個別運動と集団運動の問題であります。個別運動と集団運動の関係は、原子核ばかりでなく、今日の物理学全体の重要な問題ですが、液滴模型によってしられているように、陽子と中性子の集団運動は、ニールス・ボーアによってはじめられた考えであり、また個別と集団の対立する概念は、ニールス・ボーアの相補性 KOMPLEMENTARITAETの典型ともいえます。このような意味で、本日の御講演は、ニールス・ボーア生誕百年を記念するにもっともふさわしいものであります。

物理学のような学問にとっては、その成果が本質であって、だれがどうした、というようなことは 2 次的なものに過ぎない、という意見があります。確かに、客観的存在として科学は、個々の人間を離れたものでありますが、科学研究は人間の営為であり、その発展は、それに関係した人々の生きかた、思想ときりはなせるものではありません。それどころか、breakthrough、科学の革命というものは、それを成し遂げる人に負うところが大きいのが常であります。EINSTEIN がいなくても1915年頃には相対性原理は誰かが発見したでしょうし、NIELS BOHR がいなくても、1920年までには、水素原子の量子論はうまれたかもしれません。現に A.ハースや J. W.ニコルソンのような人々の試みもあったわけですが、1913年のボーア理論は、単に水素原子の理論ではなく、それ以後10年余りにわたる苦闘を通して水平線の彼方の新世界への展望を指示するものでありました。そして NIELS BOHR が量子力学の誕生とその発展に果たした指導的な役割が如何に偉大であったか、これは今更ここで申し上げるまでもないことと存じます。コペンハーゲン精神 COPENHAGEN GEIST は新しい物理学を貫き、新しい時代の科学を産む力となりました。ニールス・ボーア研究所は国際的協力の中心となり、ヨーロッパはもとより、アメ

リカからも、アジアからも、若い人々が競い集まりました。開国以来半世紀にしかなっていなかった日本からも、高嶺俊夫、仁科芳雄、堀健夫、木村健二郎、杉浦義勝、有山兼孝等の方々が留学され、帰国されてからは、それぞれに日本の近代科学の指導者として活躍されたのでありました。

なかでも仁科芳雄先生は、BOHRとボーア研究所に最も深い関係をもたれた方で ありました。先生は、東大の電気工学科を御卒業後、理化学研究所に入られ、1921 年にヨーロッパに行かれ、1923年から1928年までコペンハーゲンに滞在して BOHR 教授のもとで研究されました。実験的研究も数々なさいましたが,最も有名なお仕 事は、当時出たばかりのディラックの相対論的量子力学をガンマ線の電子による散 乱の問題に適用したクライン一仁科の公式の導出であります。仁科先生は、ボーア 教授の御一家とも大変に親しく、ボーア教授の子供さんたちからは、オンケル・ニ シナと呼ばれておられたそうです。日本に帰られてからは、理化学研究所に拠って、 原子核や宇宙線の研究を始められる一方,朝永先生をはじめ理論研究者をあつめて, 日本の近代物理学の一大中心をここに築かれました。帝国大学が容易に旧態を脱し えなかった当時、この仁科先生の御努力はまさに日本の物理学の脱皮の一大契機で ありました。その後、1935年には、湯川先生の中間子理論が現れ、また仁科研究室、 大阪大学の菊池研究室などにおいて、原子核の実験研究もおおいに進み、わが国の 物理学もようやく世界の第一線に伍する日が近いことを思わせるに至りましたが、 戦争のために大きな挫折をこうむったことは痛恨の極みであります。しかし、戦後 40年、わが国の科学、ひいては技術の今日あるのは、戦前1930年代のこのような貴 い努力に負うことを私共は忘れてはならないと思います。この意味で、私共はまた、 私共の今日を特別に NIELS BOHR に負うものであります。戦後40年のあいだに も、ニールス・ボーア研究所に留学したわが国の研究者は数十人にのぼり、その人々 はまた,日本の各大学や研究所において指導的な活動を続けておられます。

日本の物理学者には、このように、BOHR の弟子、孫弟子、曾孫弟子ともいうべき人々が多いわけでありますが、NIELS BOHR はいつも日本の人々に暖かい思いをよせておられました。日本を訪れられたのは、1937年、ただ一回だけであったようですが、その思い出はボーア家でいつも楽しく語られていたようです。私は残念

ながら、BOHR 先生に親しくお目にかかる機会を得ませんでしたが、かつて BOHR 夫人から、ボーア研究所にいた日本人のこと、日本訪問の思い出など、お話を伺ったことがあります。この会場の外のホールには、その折の写真もふくめて、NIELS BOHR の思い出を語る写真が展示されていますので、すでに御覧いただいたかと存じます。

以上、いろいろ申しあげましたが、仁科芳雄先生の偉業を記念するために設立された仁科記念財団は、このように NIELS BOHR とニールス・ボーア研究所とは浅からぬ御縁があるわけであります。朝永先生が理事長でいらっしゃった頃、AAGE BOHR 教授をお招きして御講演いただいたこともありますし、先生の御努力によって、日本万博協会がニールス・ボーア研究所の国際協力活動にかなりの資金援助を行ったこともございます。また現在、仁科記念財団から2人の若い研究者が在外研究員として派遣されています。

今年の始め頃、かつてニールス・ボーア研究所に留学された方々から、NIELS BOHR 生誕百年に際して日本でも何かやりたい、という声が挙ってまいりましたが、仁科記念財団としてもこれはまことにしかるべきことと考えまして、この記念講演会の計画を進めました。何分、世界中でいろいろ計画があり、むつかしいのではないか、と案じましたが、幸い MOTTELSON 教授がこころよく、当方の招きを受けて下さいましたので、この講演会を企画することができました。また、日本学術会議、日本物理学会は、この趣旨に御賛同くださいまして、当財団とともにこれを主催していただきました。これは錦上花を添え、私共としてまことに嬉しく、ここに一言お礼を申しあげる次第です。限られた時間に、じゅうぶん意をつくすことはできませんが、これをもって御挨拶にかえさせていただきます。

# §3. 仁科記念賞について

仁科記念財団の古い出版物, たとえば NKZ の創刊号には, 仁科記念賞についてつぎのように書かれています。

「仁科記念賞は、原子物理学およびその応用の分野できわめて優秀な成果をおさめた研究者に贈るものであります。この賞の特色は、功成り名遂げた大先輩に贈られるのでなく、むしろこれからの活躍を大いに期待される若い研究者に贈られる点にあります。」

いろいろな賞が設けられるようになっている現在、仁科記念賞がここに示されている特色を失わないようにしようという方針は、当然でありましょう。この文面には、はっきりしないところがあることは否めません。しかしいかに表現を詳細にしても、結局それは実例で示すことには及ばないということも真理であります。それで、1985年版の「案内」では、特に記念賞について述べることをしませんでした。

ところが、昨年、久保理事長の発議で、候補者の推薦を依頼するかたの範囲を拡大したことと関連して、若いかたのなかには、業績を重視して、先輩を推薦なさるかたもあり得るだろうと考えました。いままでの受賞者の名を見ても、受賞当時の年齢を思いうかべることは若いかたにはできるとは限らないからです。

そこで、「若い」ということと、「応用」ということについて、どのように考えるべきかについて、アンケートで意見を求めました。かなりのかたから回答があり、「若い」という点については、年齢制限を明示されたかたもありましたが、上述の文面の常識的解釈でよいとするのが大勢のようでした。

「応用」という字句は、基礎科学における原子物理学の応用という解釈が大勢でした。今日では、物理学の全分野が原子物理学に無縁でないから、受賞の対象とする分野は、単に「物理学」とすればよいという意見もありました。境界領域の研究の重視のために、物理以外の領域を、輪番的に物理と組みあわせてその年の受賞分野とするという考えに対しては、問題にしたかたは全員反対されました。どの分野にかぎらず、独創的な研究があらわれたら、受賞の対象とすべきだというわけです。その意味では、候補者の推薦も、なるべく広い範囲のかたにご依頼するのがよいし、推薦された候補の数が増すと、選考の仕事もそれだけ大仕事となります。そのことを考慮して、推薦の〆切を1カ月はやくして8月末日としました。推薦依頼状がとどきましたら、ご協力くださいますよう、お願い申しあげます。

# § 4. 仁科記念研究奨励金について

この研究奨励金は、最近は、小規模国際研究集会の助成と、わが国の若い研究者 の海外での共同研究への援助にあてられています。

小規模国際研究集会については、その集会の場で、独創的な研究の芽が生まれることを期待しております。仁科記念賞候補者の推薦の依頼状を送る際に、同封で、その推薦ご依頼に関する通知を送りますから、ご推薦くださるなり、その通知の広報にご協力くださることを、お願いします。

研究者の海外での共同研究への援助について述べますと、仁科記念財団が派遣する研究者は、単なる留学生というよりも、派遣された先の国でおこなわれる国際共同研究の重要なスタッフとなっております。そして仁科記念財団から派遣されたということが、先方の国の大学や研究所に助手等の形で就職した場合にくらべて、ずっとよく研究能率をあげることができるというのが、いままでの海外派遣研究者の多くの人の声であります。

海外派遣研究者は公募して選考します。応募手続の書類を大学や研究所に送るようにしておりますから、これらの広報にもご協力ください。

# § 5. 仁科記念講演会について

仁科記念財団は、仁科博士の誕生日にあたる12月6日の前後に、定例の記念講演会を東京で催すほか、地方講演、高校理科教員のための講演会、外国の著名物理学者の来日のおりとか朝永博士のノーベル賞受賞の際とかの特別講演会などを、随時おこなってまいりました。

定例の仁科記念講演会は、昭和61年度で32回をかぞえることになります。学者の名を冠したこの種の講演会で古い伝統をもつものが、欧米にはいくつもあります。 そのような講演会は、永続してこそ真価が発揮されます。つぎつぎに育ってくる新 しい世代が聴衆に加わるよう、年長の世代がその講演会の存在を語り伝え、白髪の 老学者が若い聴衆と一緒に講演を聴く、というようになってこそ、文化的な国の講 演会と言えましょう。そのようになるためには、永続すること、伝統がつくりあげ られることが肝要です。

仁科博士は倦むことを知らない啓蒙家でありました。博士もはじめはジャーナリズムが大きらいで、新聞記者をケンもホロロに追い返したり、わざとむずかしいことを言ってけむに巻いたりするくせがあったのですが、サイクロトロンの建設をやるようになってからは、あちこちで講演したり、新聞・雑誌に書いたり、すこしも労を惜しまぬようになり、その豹変ぶりにはアッケにとられたと朝永振一郎博士は語っています。これは、巨大科学の研究費を得るためだけではありません。一般社会に基礎研究の意義を理解させる必要を強く感じられたからでありました。そのような講演に、門弟たちはしばしば宇宙線用の大きなサイズの計数管を持ってお伴をさせられたものです。

仁科記念財団の二代目理事長であった朝永博士は、師の仁科博士におとらず公開講演に熱心でありました。朝永博士の独特な話しぶりは聴衆を魅了したものです。その名人芸とも言うべき話術は、落語を愛好したためと巷間伝えられていますが、もっと根本的には、博士があくまで直観的把握を重んじ、ものの考え方の本質を伝えることに努められたからであると言うべきでしょう。朝永博士が仁科記念講演会にいかに熱心であったかは、33回の講演会のうち9回までの講演をみずから引き受けられたことにもあらわれています。朝永博士およびそのほかの講演者たちの名講演の記録は、財団の初代理事長渋沢敬三氏の熱心な意見に従って発刊された財団の広報誌「NKZ」に掲載され、バックナンバーでそれらを読むことができます。バックナンバーのうちでもことに注目をひいているのは、朝永博士のノーベル賞受賞講演の日本語版とも言うべき1966年6月の特別講演の記録の載った「NKZ」No.7であります。その講演はストックホルムでなさった英語の講演よりも倍も詳しくて「こくのある」ものであります(その号は需要が多いため再版されました)。

朝永博士は1978年病におかされ翌年7月に他界されましたが、病床にあっても仁 科記念財団を気にかけられ、ことに記念講演会については、つぎのように言われま した。

「仁科記念財団は社会に向かって開かれた窓を持たなくてはならない。記念講演会はその大切な窓の役割を果たすべきものだから、すくなくとも定例講演会は努力して続けるべきだ。随時の開催というのではルーズになりやすい。」

晩年、朝永博士は財団が準備するものとは別の、数多くの講演会で話をしておられましたが、仁科記念講演会については、そのような特別な意義を強調しておられたのです。

仁科記念講演会は、かつては「朝日講堂」のような大講堂を借りて、不特定な世間一般に向かって広報して来聴を待っていたのですが、朝永博士を失った財団は、いろいろ考えた結果、新しい方式を試みることにしました。以前の方式では、世間が派手になったのに負けないだけの広報をすることがむずかしく、ことに学生諸君には徹底しないうらみがありました。そこでたまたま朝日新聞社の移転で「朝日講堂」が使えなくなった事情もあり、新しい方式にきりかえたのです。それはつぎのような方式です。

仁科記念講演会を学生や若い研究者の層に広く知ってもらうために、いわば「拠点校」の大学を輪番にきめて、すくなくともそこの学生は来聴しやすいようにする。まず都内の大学のいくつかに順々にお願いして会場を借り、そこの教授たちから学生に勧めてもらう。また他の大学の学生や若い研究者たちにも参加を呼びかける。

この方式にしてから、すでに定例講演会を7回、そのほかに同じ方式の地方講演会を4回おこないました。幸いにして新しい方式は時宜に適していたと見え、どの講演会も、多数の学生聴衆を集めて盛大におこなうことができました。

大学と共同主催でおこなう方式の長所は、その大学の学生諸君が参加しやすいことのほかに、他大学の諸君を勧誘することが、大学間のかべを低くするという効果がある点です。さらにまた、同窓生が顔をあわせる機会にもなるでしょう。こうして、貴重な伝統が育ちつつあるのですが、しかし、つぎの点も考慮する必要があります。まわり持ちで共催する大学が4つとか5つとかになりますと、当然一つの大学にとっては4年から5年の周期となり、そのあいだに学生がすっかり変わるだけでなく、教室員の異動もおこります。それゆえ、番に当ってない大学でも、広報の

点で協力していただくとか、仁科講演会というものの意義について、新しい教室員に申しつぎをしていただくとか、が望ましいわけです。そこで今年3月29日日本物理学会年会(会場青山学院大学)のおりにおこなったインフォーマル・ミーティングの席で、およびその後つぎのようなアンケートを送ることによって、この記念講演会の発展のためにご協力をお願いした次第です。

#### アンケート

- 1. あなたの大学、学部、教室名とあなたのお名前。
- 2. 講演会のポスターやビラを、どなたあてに送るのが適切か。
  - a. 学科事務室あて, b. 個人あて(3名以内のお名前)
- 3. 広報の仕方についてのご批判、ご助言。
- 4. 大学,学部の広報,あるいは学生新聞で,学生がよく読むものの名称,発行日, 原稿〆切日。
- 5. 大学,学部でおこなっている記念講演会,公開講座の名称,世話担当者,最近 おこなわれたもののプログラム等。
- 6. 仁科記念財団発行の講演記録の普及にご協力いただく方法。
  - a. 図書館・図書室に有料で購入させる。
  - b. 何かと交換する方式をとらせる。
  - c. 無料で寄贈するものを目のつくところに置かせる。
- 7. その他、お気づきの点、ご提案。

すでに多数のかたから、お返事をいただき、感謝しておりますが、いまからでも お便りをくだされば幸いと存じます。(送り先 仁科記念財団 玉木英彦あて)

# § 6. 財団出版物の有料頒布について

公開講演会は、仁科記念財団の重要な事業の一つですが、その講演会に来聴できなかった人のためも考えるべきであり、講演記録をぜひ出版する必要がある、というのが、初代理事長故渋沢敬三氏の強い願望でした。また公開講演会について二代

目理事長故朝永振一郎博士は、これは財団が社会に向かって開いている大切な窓だから、手をぬいてはならないという持論でした。われわれは講演会活動を活発にし、おこなわれた講演はできるかぎり記録を出版するように努力しております。そして出版されたものは、できるだけ多くの人々に読んでもらいたいと念願しております。講演会の場合と同様、無料がよいという考えもあるかも知れませんが、無料で頒布すればよく普及するというものでもありませんので、有料といたします。そして、事務能力が不十分であることを考慮して、下記のようにしたいと存じます。

- (1) リストに載っているものを各冊一律に500円とする。
- (2) 郵送の場合、送料をリストに附記した概算で負担していただく。
- (3) 郵便振替を利用し、その用紙通信欄に、所属・職名等も記入していただく。

# § 7. 昭和60年度事業報告のまえがきから

昭和60年度は仁科記念財団の創立30周年にあたるとともに、ニールス・ボーア生誕百年の年でした。ニールス・ボーア教授は、仁科博士の恩師であります。ボーア教授が主宰したコペンハーゲン大学の「理論物理学研究所」は、1921年に発足して以来、原子物理学研究のメッカとして、世界各国の若い研究者を集めた国際的共同研究の場でありましたが、仁科博士はそこに1923年から6年間も学んだのでした。日本における恩師、長岡半太郎博士にあてた手紙に、ボーア教授を招聘するようにという提案が述べられていますが、提案理由として、ここで学んでいるさまざまな国の前途有為の研究者と交際し得るようになること、多くの日本人研究者がボーア教授のお世話になっているのに対してお礼する意味も持ち得ることがあげられています。その招聘は9年の後、1937年に実現され、わが国の物理学から生物学にいたるまでの研究を活気づけました。ボーア教授は、科学の面だけでなく、もっと広い意味でわが国にとって恩人であります。戦後の経済の壊滅と、占領下の制約のなかにあって、国の再建に科学を役立たせるべく奮闘した仁科博士を、遠方から励まし、博士の科学使節としての訪欧・訪米を助け、それがひいてはわが国の国際社会への

速かな復帰に大きな力となったのでした。

ボーア生誕百年を記念する行事は、世界的規模でおこなわれましたが、わが国ではもっとも縁の深い仁科記念財団が中心となって記念の事業をおこないました。コペンハーゲンからモッテルソン教授を招いて、日本学術会議および日本物理学会と共同で催した記念講演会は盛会で、そのおりにおこなわれた「ボーアと日本」に関する展示も好評でした。コペンハーゲンでおこなわれた世界的記念集会には、当財団の理事長が出席し、また数次の国際的学術集会にわが国から参加した研究者に旅費を援助しました。デンマーク大使館に送られて来たボーア教授に関するドキュメンタリー映画を、当財団が借りて、12月の定例仁科講演会で上映したほか、今年3月末の日本物理学会年会でも上映して、多数の人々に感銘を与えました。

上記のモッテルソン教授の講演のほか、今年度は故朝永博士と一緒にノーベル賞を受けた米国のファインマン教授を招いて講演会をおこない、共同主催者学習院の大講堂にあふれる聴衆を集めました。地方講演も、訪日中のシカゴ大学南部陽一郎教授による東北大学理学部と共同主催の講演会で、聴衆が大講義室にあふれました。ファインマン教授の講演とモッテルソン教授の講演の記録は、今年度すでに出版しました。

以上のほか、昭和60年度、当財団は、国際シンポジウムの助成に力をそそぎました。当財団のもっとも大切な仕事である仁科記念賞の選考に関して、今年度は推薦依頼の範囲を広げて、一層意義のあるものにすることに努めました。

# §8. 仁科記念財団の活動

一昭和60年度一

# 1. 仁科記念賞

本年度は下記3件3氏の研究に対して贈呈した。

受賞者 マサチューセッツ工科大学教授 田 中 豊 一 研究題目 ゲルの相転移現象の研究 推薦理由 ゲルは高分子の網目が溶媒を含んで膨潤したものであってゴム,プラスチックフィルムなどの化学製品のみならず,生体内にもいたるところに見いだされる一般的な物質形態である。田中氏は温度・溶媒組成・pH・イオン組成,また電圧などの極微の変化がゲルの体積を数百倍も可逆的に変化させることを発見した。さらに,氏は網目ゆらぎの臨界現象を発見し,理論的考察とともにこの現象がゲルの相転移であり気体-液体間相転移のように一般的なものであることを証明した。この発見によりゲルを統一的に理解することが初めて可能になった。この全く新しい分野の発展は殆ど氏のグループによって推進・確立されたといっても過言でなく,世界的に物理・化学・高分子科学・医学の研究者,電子・化学産業の技術者の間に多くの関心をひきおこした。また,数百倍に及ぶ不連続な体積変化はセンサー,スイッチ,記憶素子,また人工筋肉などメカノ化学変換素子として利用することが出来,ゲルの広汎な応用に道を開いたものである。

受賞者 新技術開発事業団研究員(グループリーダー) 飯島 澄 男研究題目 少数原子集団の動的観察

推薦理由 飯島澄男氏の研究のうち最も特筆すべきものは、氏の独特の改良になる透過電子顕微鏡の技術を駆使して、いわゆる超微粒子とよばれる、原子数で数百個程度、直径にして $10^{-9}$ m 程度の微細な粒子の1粒を顕微鏡の画面にとらえ、その中の原子の配列を明らかに写しただけでなく、この粒の中の原子が電子線の衝撃を受けて動きまわり、結晶構造や形態を変える様をビデオテープ上に鮮明に記録した点にある。

このことは一方において超微粒子の結晶物理学にとって重要な情報を与えるだけでなく、合成化学の中で果たす触媒としての金属微粒子の動的特性が観察されることによって、触媒化学の発達に重要な研究手段を提供するものである。

受 賞 者 宇宙科学研究所教授 田 中 靖 郎

研究題目 衛星「てんま」による中性子星の研究

推薦理由 田中氏は我が国のX線天文学の進展の初期の時代より参画し数々の成果をあげてきた。ことに1983年打ち上げられた科学衛星「てんま」については、

開発,打上げ,観測を指導し、とくに大型の高分解能 X 線検出器,蛍光比例計数管を衛星搭載用として協力者とともに開発している。この結果 X 線天文学の分野でスペクトルを通して天体現象をとらえるという新しい局面を切り開いた。

「てんま」の観測を通して、X線バーストによる中性子星の物理的性質、鉄の輝線スペクトルの中性子星表面での赤方偏移等々数多くの新しい現象が発見され、X線天体としての中性子星の性質が解明されてきたが、これらの研究を総合的に指導し、X線天文学を画期的に進めた田中氏の功績は大きい。

# 2. 仁科記念講演会

本年度は次の記念講演会を開催した。

a. 地方講演会

(東北大学理学部と共同主催)

日時 昭和60年4月26日 金午後5時~7時(開場4時半)

場所 東北大学理学部大講義室(青葉山)

講演 「素粒子」は粒子か?

南部陽一郎教授

(シカゴ大学,米国)

b. 1965年ノーベル物理学賞受賞者ファインマン教授を招いての講演会 (学習院と共同主催)

場所 学習院創立百周年記念会館

講演 "The Computing Machines in the Future"

「"未来の計算機"]

Richard P. Feynman 教授

(カリフォルニア工科大学、米国)

c. ボーア生誕百年記念講演会

1975年ノーベル物理学賞受賞者モッテルソン教授を招いての講演会

(日本学術会議 日本物理学会と共同主催)

日時 昭和60年11月9日出午後2時~4時(開場1時)

場所 日本学術会議講堂

講演 ニールス・ボーアと現代物理学

Ben R. Mottelson 教授

(NORDITA, コペンハーゲン, デンマーク)

展示 ニールス・ボーアと日本

d. 第31回定例講演会

(早稲田大学理工学部と共同主催)

日時 昭和60年12月7日出午後1時半~4時半(開場1時)

場所 早稲田大学理工学部57号館202番教室

映画 「ニールス・ボーア」(デンマーク大使館提供)

講演 量子力学と観測問題

並木美喜雄教授

(早稲田大学)

3. 仁科記念研究奨励金

本年度は下記4件のシンポジウムに援助した。

a. 対象:"第 5 回 f-電子系における結晶場及び異常混成効果"の国際会議,1985 年 4 月15日~18日

金 額:800,000円

代表者:東北大学理学部教授 糟谷忠雄

参加者:国内118名,国外48名

b. 対象:"量子重力理論と宇宙論"に関する第8回京都サマーインスティテュート、1985年5月7日~11日

金 額:1,000,000円

代表者:京都大学基礎物理学研究所教授 佐藤文隆

参加者:国内100名。国外20名

c. 对象:"黒鉛層間化合物"国際会議, 1985年5月27日~30日

金 額:1.800.000円

代表者:群馬大学工学部教授 田沼静一

参加者:国内71名,国外44名

d. 対象:第8回 "エキソ電子放射と応用"国際学会,1985年8月25日~30日

金 額:1,200,000円

代表者:大阪大学産業科学研究所長 川西政治

参加者:国内106名,国外23名

e. 対象:第6回"核物理偏極現象"国際会議,1985年8月26日~30日

金 額:12.852.876円

代表者:大阪大学核物理研究センター長 近藤道也

参加者:国内171名,国外134名

## 4. 研究者の海外派遣

昭和60年度海外派遣研究者

京都大学理学部 日本学術振興会奨励研究員 清水良文

留学先 ニールス・ボーア研究所(デンマーク)

研究目的 高スピン状態における原子核の分光学的研究

昭和59年度派遣、留学期間延長

立教大学理学部,日本学術振興会奨励研究員 鈴木昌世

留学先 CERN (スイス)

研究目的 電離放射励起および光励起に基づく希ガス・シンチレーション(混合系、凝縮相を含む) に関する実験的研究

東京大学理学部,日本学術振興会奨励研究員 梁 成吉

留学先 ニールス・ボーア研究所 (デンマーク)

研究目的 格子量子色力学,クォーク・グルオンの力学系の非摂動的構造の 解明

### 5. その他

プリンストン高級研究所の Freeman J. Dyson 教授の講演(1984年10月)の記録 "Origins of Life" — Publication No. 22, カリフォルニア工科大学の Richard P. Feynman 教授の講演(1985年8月)の記録 "The Computing Machines in the Future" — Publication No. 23, およびコペンハーゲン NORDITA の Ben R.

Mottelson 教授の講演 "Niels Bohr and the Development of Concepts in Nuclear Physics" — Publication No. 24 を出版した。

# §9. 「財団法人仁科記念財団設立趣意書並びに寄附行為」(抄)

委大第164号

財団法人 仁科記念財団設立代表者 渋 沢 敬 三

昭和30年11月10日付で申請のあった財団法人仁科記念財団の設立を民法第34条によって許可します。

昭和30年12月5日

文部大臣 清瀬一郎

# 財団法人仁科記念財団設立趣意書

文化勲章受賞者、日本学士院会員故仁科芳雄博士は、わが国の原子物理学の創始者であり、湯川博士等、世界的学者の育ての親でありました。博士が戦前、当時世界で第一級の大サイクロトロンを建設されたことは、そのサイクロトロンの悲劇的最後とともに、あまねく世に知られているところであります。

故仁科博士は、世界的な原子物理学者であったのみならず、戦後国歩艱難の時期に際しては、旧財団法人理化学研究所を潰滅の危機から救って株式会社科学研究所を興し、科学技術こそ国の経済復興の原動力であるという信念を貫かれ、身をもってこれを実践されました。博士はまた、その学識と円満な人格によって世界の学界の信望を一身にあつめられ、博士の存在がわが国の国際社会へのすみやかな復帰に大きな助けとなったことも、永く忘れることのできない点であります。

おもうに科学技術の振興は、国の自立復興上、万難を排して成し遂げなければならない喫緊事であります。なかんずく、博士が生前心血をそそがれた原子物理学が、

化の進歩に寄与することを目的とする。

- 第4条 この法人は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。
- 1. 原子物理学およびその応用に関する研究において、きわめて優秀な成果を収め た者に対する仁科記念賞の授与
- 2. 原子物理学およびその応用に関する仁科記念講演会の開催
- 3. 原子物理学およびその応用に関する図書を蒐集公開する仁科記念文庫の経営
- 4. 原子物理学およびその応用に関する研究を行う研究機関および個人に対する仁 科記念奨励金の授与
- 5. 原子物理学およびその応用に関する研究を行う学者の招聘および海外派遣
- 6. 原子物理学およびその応用に関する知識の普及を目的とする出版物の刊行
- 7. その他前条の目的を達成するために必要な事業

# 第3章 資産および会計

第5条 この法人の資産は、次のとおりとする。

- 1. この法人設立の当初に仁科記念財団設立発起人会が寄附した別紙財産目録記載 の財産
- 2. 資産から生ずる果実
- 3. 事業に伴う収入
- 4. 寄附金品
- 5. その他の収入
- 第6条 この法人の資産を分けて基本財産および運用財産の二種とする。

基本財産は、別紙財産目録のうち基本財産の部に記載する資産および将来基本 財産に編入される資産で構成する。

運用財産は、基本財産以外の資産とする。ただし、寄附金品であって寄附者の 指定あるものは、その指定に従う。

# 第7条-第10条 略

第11条 この法人の決算は、会計年度修了後2個月以内に理事長が作成し、財産目録、事業報告書および財産増減事由書とともに監事の意見をつけて理事会の承認

を受け文部大臣に報告しなければならない。

この法人の決算に剰余金があるときは、理事会の議決を経て、その一部または 全部を基本財産に編入し、あるいは翌年度に繰越すものとする。

第12条-第13条 略

# 第4章 役員、評議員および職員

第14条 この法人には、次の役員をおく。

理事 20名以上25名以内(内理事長1名,常務理事3名以内)

監事 2名以上4名以内

第15条 理事および監事は、評議員会でこれを選任し、理事は、互選で理事長1名、 常務理事3名以内を定める。

第16条 理事長は、この法人の事務を総理し、この法人を代表する。

理事長に事故があるとき、または理事長が欠けたときは、理事長があらかじめ 指名した常務理事が、その職務を代行する。

常務理事は、理事長を補佐し、理事会の決議に基いて日常の事務に従事する。 第17条 理事は、理事会を組織し、この法人の業務を議決し執行する。

第18条 監事は、民法第59条に定める職務を行う。

第19条 この法人の役員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

補欠による役員の任期は,前任者の残任期間とする。

役員は、その任期満了後でも、後任者が就任するまでは、なお、その職務を行 う。

役員は、この法人の役員たるにふさわしくない行為のあった場合、または、特別の事情のある場合には、その任期中でも評議員会および理事会の議決によってこれを解任することができる。

第20条 役員は、有給とすることができる。

第21条 この法人には、評議員60名以上70名以内をおく。評議員は、理事会でこれを選出し、理事長が委嘱する。評議員には、第19条を準用する。この場合には同条中「役員」とあるのは、「評議員」と読み替えるものとする。

- 第22条 評議員は、評議員会を組織し、この寄附行為に定める事項のほか、理事会の諮問に応じ、理事長に対して助言する。
- 第23条 この法人に顧問若干名をおくことができる。顧問は、理事会でこれを選出し、理事長が委嘱する。

顧問の任期については第19条を準用する。この場合には、同条中「役員」とあるのは、「顧問」と読み替えるものとする。

第24条 この法人に事務を処理するために書記等の職員をおく。

職員は、理事長が任免する。

職員は, 有給とする。

# 第5章 会 議

第25条 理事会は、毎年2回理事長が招集する。ただし、理事長が必要と認めた場合、または理事現在数の3分の1以上から会議の目的事項を示して請求のあったときは、理事長は、臨事理事会を招集しなければならない。

理事会の議長は,理事長とする。

- 第26条 理事会は、理事現在数の3分の2以上が出席しなければ議事を開き議決することができない。ただし、当該議事について書面をもって、あらかじめ意思を表示した者は、出席者とみなす。理事会の議事は、この寄附行為に別段の定めがある場合を除くほか、出席理事の過半数をもって決し、可否同数のときは議長が決する。
- 第27条 次に掲げる事項については、理事会において、あらかじめ評議員会の意見 を聞かなければならない。
- 1. 予算および決算に関する事項
- 2. 不動産の買入れ、または基本財産の処分に関する事項
- 3. その他この法人の業務に関する重要事項で理事会において必要と認めた事項 第25条および前条は、評議員会にこれを準用する。この場合には、第25条およ び前条中「理事会」および「理事」とあるのは、それぞれ「評議員会」および「評 議員」と読み替えるものとする。

第28条 すべての会議には、議事録を作成し、議長および出席者代表 2 名が署名捺 印した上で、これを保存しなければならない。

# 第6章 寄附行為の変更ならびに解散

第29条 この寄附行為は、理事現在数および評議員現在数のおのおの3分の2以上の同意を経、かつ、文部大臣の認可を受けなければ、変更することができない。

第30条 この法人を解散するには、理事現在数および評議員現在数のおのおの4分の3以上の同意を経、かつ、文部大臣の許可を受けなければならない。

第31条 この法人の解散に伴う残余財産は、理事全員の合意を経、かつ、文部大臣 の許可を受けて、この法人の目的に類似の目的を有する公益事業に寄附するもの とする。

# 第7章 補 則

第32条 この寄附行為の施行についての細則は,理事会の議決をもって別に定める。

# 付 則

第33条 この法人設立当初の理事および監事は、次のとおりである。

理事(理事長)渋 沢 敬 三 理事(常務理事)朝 永 振一郎 理事(常務理事)村 越 百 理事 石川一郎 理事 植 村 甲午郎 理事 1 山 直 人 象 二 理事 酒 井 杏之助 理事 瀬藤 理事 原 安三郎 理事 藤 山 愛一郎 理事 我 妻 栄 監事 茅 誠司 二 見 貴知雄 監事 武 見 太 郎 監事

昭和34年6月1日 一部(事務所所在地)変更認可

昭和41年11月8日 一部 (理事および評議員の定数)変更認可

薫

雄一

#### 役 員 名 簿

(昭和61年6月現在)

理 事 長 常務理事 久保 亮五 甲一 鎌田

英彦 玉木 安藤 豊禄

宮崎友喜雄

嘉寬

稲山

茅

宮島

井上 佐波 正一

山村

理 事

芦原 義重 太田 清蔵 南部 政二

主税

功

林

三浦

鹿島 昭一 野地 紀一 土方 武

三田

誠司 鳩山 道夫 平岩 外四

佐々木秋生

達二 浜田 庄三 堀田

監 事 評 議 員 池田 長生 赤堀 四郎 飯尾 正宏 小山 五郎 義重 芦原 池田 長生

勝茂

薫

有山 兼孝 石橋幹一郎 凱実 岩佐

耕輔

龍興

瀬川美能留 安藤 豊禄 伊藤 達二

稲山 嘉寬 江戸 鹿島 木村健二郎 小山

井上 英雄 太田 清蔵 甲一 昭一 鎌田 久保 亮五 光夫 五郎 坂井 正雄 瀬川美能留 錬一 田島 英三

上坪 宏道 小谷 正雄 佐々木秋生 関本 忠弘 玉木

岡本

植村 泰忠 小田 稔 茅 誠司 小林 稔

正一

柾

伸二

豊

佐波

竹内

豊沢

福井

杉本 竹中 中根 良平 仁科雄一郎 花村仁八郎

土方

藤井

政二 南部 西村 純 達二 浜田 外四 平岩 伏見 康治 三田 勝茂

向坊

芳田

隆

奎

英彦 西川 哲治 野地 紀一 幸男 早川 現

西島 和彦 鳩山 道夫 林 主税

三浦 功 宮島 龍興 山本源左衛門

武

忠男

弘世 堀田 庄三 宮崎友喜雄

山崎 敏光

昭允

和田

丸森 寿夫 宮沢 弘成 山村 雄一

問 顧 村越 百

# 財団法人仁科記念財団

113 東京都文京区本駒込 2 丁目28番45号 電 話 東京 03 (946) 7 1 1 1 (代表) 郵便振替番号 東京 3-135934

(1986年6月) 1,200